

せつこさんのフランスだより

会期：2024年7月13日(土)～9月1日(日)

S. Migishi

展示目録

番号	作品名	制作年	年齢	縦×横(cm)	号	技法・材質
1	自画像	1925(大正14)	20歳	30.5× 22.0	3F	油彩・キャンバス
2	花・果実	1932(昭和7)	27歳	90.0× 72.0	30F	油彩・キャンバス
3	群がる馬	1938(昭和13)	33歳	162.0× 130.0	100F	油彩・キャンバス
4	室内	1939(昭和14)	34歳	80.0× 130.0	60M	油彩・キャンバス
5	静物	1943(昭和18)	38歳	60.6× 72.7	20F	油彩・キャンバス
6	鳥と琴を弾く埴輪	1957(昭和32)	52歳	97.0× 130.3	60F	油彩・キャンバス
7	静物	1958(昭和33)	53歳	65.0× 80.5	25F	油彩・キャンバス
8	カーニュ風景	1969(昭和44)	64歳	34.0× 27.0	5F	油彩・キャンバス
9	カーニュ風景	1969(昭和44)	64歳	90.9× 72.7	30F	油彩・キャンバス
10	細い運河	1974(昭和49)	69歳	92.0× 73.0	30F	油彩・キャンバス
11	雲と海の対話(嵐)	1975(昭和50)	70歳	162.1× 130.3	100F	油彩・キャンバス
12	ブルゴーニュのブドー畑	1979(昭和54)	74歳	80.3× 100.0	40F	油彩・キャンバス
13	僧院	1979(昭和54)	74歳	100.0× 100.0	40S	油彩・キャンバス
14	トネールの白い川	1980(昭和55)	75歳	130.3× 97.0	60F	油彩・キャンバス
15	坂の上へ(アンダルシア)	1987(昭和62)	82歳	92.0× 73.0	30F	油彩・キャンバス
16	モンマルトルの家	1987(昭和62)	82歳	91.2× 72.5	30F	油彩・キャンバス
17	イル・サンルイの秋	1987(昭和62)	82歳	89.0× 116.0	50F	油彩・キャンバス
18	城のある町	1988(昭和63)	83歳	120.0× 120.0	50S	油彩・キャンバス
19	白い花(ヴェロンにて)	1989(平成元)	84歳	73.0× 92.0	30F	油彩・キャンバス
20	花(ヴェロンにて)	1989(平成元)	84歳	60.0× 92.0	30M	油彩・キャンバス
21	サンポールの地下道	1954(昭和29)	49歳	41.0× 30.5	6F	パステル、水彩・紙
22	イル・サンルイ	1954(昭和29)	49歳	41.0× 31.0	6F	鉛筆、パステル、水彩・紙
23	ニースのプロムナードサングレ	1980(昭和55)	75歳	45.0× 32.0	8P	パステル・紙
24	三岸黄太郎「わが家よりのエッフェル塔」	1991(平成3)		73.0× 92.0		油彩・キャンバス

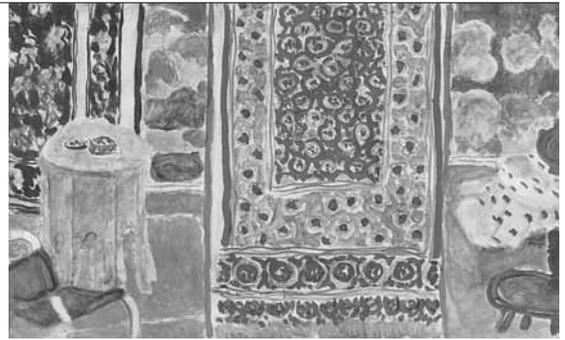
※都合により展示の内容を一部変更することがあります。作品目録のNoは作品の並びと異なります。

せつこさんのフランスだより

初渡欧を果たした1954年の素描作品や、1968年の2度目の渡欧以降、フランスで20年余り生活するなかで描かれた作品を中心に紹介します。旅するせつこさんとともに、絵画の世界を巡りましょう。

フランスの画家たちからの影響

洋画家・三岸好太郎との結婚後、3人の子どもに恵まれた節子でしたが、家事や育児に追われ、外出する機会が少なくなっていました。そのため、初期の頃は、室内画や静物画をメインに描いています。色彩画家(カラリスト)と呼ばれた節子の豊かな色彩感覚によって、鮮やかな原色を多用した色づかいと独特の筆致で描かれているのが特徴です。こうした表現は、アンリ・マティスやピエール・ボナールといった、フランスの画家たちの作品を研究した成果と考えられます。



三岸節子《室内》1939年 ©MIGISHI

念願の初渡欧を経て

節子が初めてパリの地を踏んだのは、1954(昭和29)年の春。私費留学で先に渡欧していた息子・黄太郎のあとを追う形で、長年憧れていたフランスへ渡ります。これまで室内画や静物画を多く描いてきた節子にとって、この渡欧は初めての風景画への挑戦ともいえる旅でした。パリに着いてすぐに購入した車を黄太郎が運転し、はじめはパリ近郊、その後中世の古い城館が点在するロワール地方、南仏カーニュなどを訪れ、その風景をデッサンにおさめました。節子と旅を共にし支えてきた黄太郎は、当時の節子の様子を振り返って、



1954年 パリ・チュイルリー公園にて

母にとっては、何といても憧れの巴里である。右を見ても左を見ても感動し涙を流していた。(*1)

と語っています。スペイン、イタリアにも足を伸ばし、帰路の途中ではエジプトにも寄っていますが、節子にとっては、この約一年半の滞欧生活は短く感じられたようです。

一年半の滞在では余りにも不十分であり、フランスは私を風景画家にはしてくれなかった。そんな思いが一九六八年の再渡仏となったのかもしれない。(*2)

再びフランスへ

1968(昭和43)年、63歳になった節子は、本格的に風景画に取り組むべく、黄太郎一家とともに二度目の渡仏を果たします。拠点としたのは、初渡欧時にも訪れていた南仏カーニュ。年中通して気候も温暖で過ごしやすく、「何処も彼処も絵の構図になる」(*3)と語っています。石造りの建物と、赤いタイルの階段が奥へと続く印象的な光景を描いた《カーニュ風景》[No.8]は、節子が日常的に歩いてきたお気に入りの場所で、作品のモチーフとしてもたびたび登場しています。



三岸節子《カーニュ風景》1969年 ©MIGISHI

「もともとヨーロッパの滞在期間は5年くらいと考えていた」(*4)という節子でしたが、1974(昭和49)年にパリで開催した個展「花とヴェネチア」が大好評を得たことから、帰国を取りやめてフランスで制作を続ける決意をします。カーニュの借家は既に引き払ってしまったため、パリから約120キロ離れたブルゴーニュ地方の小村・ヴェロンにあった中古の農家を購入、アトリエに改造して移住しました。その後、パリでは3回個展を開催し、フランスでも高い評価を得ました。絵になるモチーフを探しに欧州各地を巡りながら、1989(平成元)年に日本に帰国するまで、20年余りをフランスで過ごしました。

学芸員 丹野 汀

(*1)『生誕100年記念 三岸節子展 永遠の花を求めて』朝日新聞社、2005年、8頁

(*2)『三岸節子ヨーロッパデッサン集 1954-1989 旅へのいざない』求龍堂、1997年、3頁

(*3)『花より花らしく』求龍堂、1977年、160頁

(*4)『三岸節子ヨーロッパデッサン集 1954-1989 旅へのいざない』求龍堂、1997年、20頁